The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者のQOLに果たす友人関係機能の検討
Author(s)	丹野, 宏昭
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 125-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 10, 2010

高齢者の QOL に果たす友人関係機能の検討 1) 2)

丹野宏昭(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

友人関係が高齢者の QOL に果たす機能を検討した。高齢者 178 名(男性 56 名、女性 118 名、不明4名、年齢 60-95 歳)を対象に、ふだんからよく会う親密な友人(HI 友人)とめったに会えないが親密な友人(LI 友人)のいずれかの想定を求め、友人関係機能尺度と関係性評価尺度と高齢者用 QOL 尺度(QOLS-E)に回答を求めた。結果は以下のとおりである。(1)HI 友人関係との“自己開示”は、高齢者の“日常の安心感”を間接的に促進していた。(2)LI 友人関係における“安心・気楽さ”、“肯定・受容”、“自己開示”は高齢者の“日常の安心感”を間接的に促進し、LI 友人関係の“肯定・受容”が高齢者の“人生の受容”を直接的に促進していた。

キーワード: 高齢者、友人関係機能、ふだんからよく会う親密な友人、めったに会えないが親密な友人、QOL

問題と目的

本研究は、高齢者の友人関係が QOL(Quality of Life)に果たす機能について検討することを目的とする。これまで高齢者の生活上の適応に影響を与える要因として、身体的健康状態や家族関係などが着目されてきた。しかし高齢者の生活上の適応に対し、友人関係は他の親密関係とは異なる重要な機能を果たしていると指摘されている。例えば前田(1992)は、高齢者のソーシャル・サポート研究を概観し、高齢者の生活における手段的なサポートは友人関係よりも家族関係が優先的に果たしているが、友人関係は情緒的サポートに属する“交流(趣味や会話を楽しむ)”を特有の機能として果たしていると論じている。浅川・古谷野・安藤・児玉(1999)や西村・石橋・山田・古谷野(2000)もまた、高齢者を対象とした調査から、手段的・道具的な支援は家族関係が優先的に果たしており、高齢者の友人関係は趣味や会話を楽しむといった情緒的な機能を果たしていることを明らかにしている。

ただし、友人関係が生活上の適応に果たす機能を検討したこれまでの研究では、主にふだんからよく会う接触の多い友人関係における具体的な関わり方やサポートによる影響ばかりが扱われてきた。しかし、高齢者においては、ふだんからよく会う友人関係だけではなく、めったに会えないが親密な友人関係もまた内的適応に重要な影響を与えていることが明らかにされている。藤田(1999)は、高齢者の人間関係に関する作文の内容分析から、高齢者の“現在、現実を支えている友人関係”は生きがいや生活のアクティブさに影響を与えており、“過去の友人関係”は自尊心や自負心に影響を与えていることを明らかにした。この結果について藤田(1999)は、Butler(1963)の“回想”の視点から、高齢者の過去の友人関係が、単なる思い出だけの存在ではなく、人生を振り返り、現在の適応状態に重要な機能を果たしているとまとめている。さらに丹野(2006)は高齢者を対象とした面接から、高齢者がふだんからよく会う友人だけではなく、めったに会えないがつきあいの長い“旧友”のような友人もまた大切な友人とみなしていることを示した。さらに古谷野・西村・安藤・浅川・堀田(2000)は、高齢者の友人関係には、“職場の仲間”のように成人期に形成されるものや、“学生時代の友人”のように青年期以前に形成される友人関係のような“旧友”が多く含まれていることを明らかにしている。以上の先行研究から、ふだんからよく会う友人関係だけではなく、現在はめったに会えないが青年期や成人期に形成された親密な友人関係の存在も、高齢者の内的適応を促進・維持する機能を果たしていると考えられる。

この 2 種類の友人関係に焦点をあてて、丹野(2007, 2008)は、“ふだんからよく会う接触頻度の高い親密な友人”を HI(high interaction)友人、“めったに会えない接触頻度は低いが親密な友人”を LI(low interaction)友人とそれぞれ定義し、大学生の HI 友人関係と LI 友人関係とが大学生の生活上の内的適応に果たす機能を検討している。このアプローチを参考に、丹野(2006)は高齢者を対象とした面接調査を行い、高齢者は HI 友人関係を“関係が比較的新しい、娯楽やコミュニケーションを望むつきあい”であり、LI 友人関係は“関係が長く、自己や人生を共有する存在として重要な関係”であると捉えていることを明らかにした。丹野(2006)はこの結果と先行研究の結果を概観し、LI 友人関係が高齢者のポジティブな過去回想や時間的展望を促進し、内的適応を促進する機能を果たしていると論じている。

以上の先行研究から、具体的なサポートやつきあいのある“ふだんからよく会う HI 友人”だけが内的適応に影響を与えているわけではなく、具体的なサポートやつきあいのない“めったに会えない親密な LI 友人”もまたわれわれの内的適応を促進・維持する機能を果た

していると考えられる。さらに、これまでの高齢者の友人関係研究では、老年期に形成された比較的新しい友人関係や、ふだんからよく会う HI 友人関係に関しては具体的･量的に検討されてきたが、めったに会えないが大切な旧来からの LI 友人との関係に関しては作文の内容分析や面接調査などの質的検討に留まっていた。そこで本研究では、高齢者の友人関係をふだんからよく会う HI 友人関係とめったに会えないが大切な LI 友人関係の側面から捉え、それらの友人関係が内的適応に果たす機能を量的に捉えることを目的とする。

友人関係が高齢者の内的適応に果たす機能を分析するにあたり本研究では、丹野(2007, 2008)や丹野･松井(2006)に基づいて、友人関係機能成分から捉える。丹野(2007, 2008)や丹野･松井(2006)は、大学生を対象に、友人とのつきあい方や関係性などの側面を分解して、内的適応に影響を及ぼしうる友人関係の下位側面(友人関係機能成分)を抽出し整理した。丹野(2008)は、友人関係機能成分が直接または関係満足度を媒介して内的適応に影響を与える仮説に基づき、友人関係機能成分と友人関係満足度と内的適応との関連を検討している。このアプローチは、友人関係の具体的なつきあい方や関係性が、直接的もしくは友人関係性全体の評価を媒介して内的適応の諸側面に与えている影響について検討できると期待される。

本研究は、丹野(2007, 2008)や丹野･松井(2006)のアプローチを参考にして、高齢者の友人関係が内的適応に果たす機能について検討することを目的とする。

また本研究では内的適応の指標として、QOL を用いる。高齢者の適応の中でも、特に QOL は高齢者問題を考える上で重要な概念とされ、心理的側面の充実度を含めた QOL 研究がさかんに行われてきている(石原･内藤･長嶋, 1992; 濱島, 1994; 星野･山田･遠藤･名倉, 1996; 柴田, 1996)。本研究では高齢者用に開発された指標である QOLS-E を用いて、高齢者の適応的生活に果たす友人関係機能を検討していく。

本研究は高齢者の友人とのつきあい方が、内的適応の諸側面にどのように影響を与えているかを明らかにすることを目的とし、高齢者の HI 友人関係と LI 友人関係とにおける友人関係機能成分が、高齢者の QOL に果たす機能について検討する。

方法

調査対象者と調査方法

個別配布･個別回収および郵送回収形式の質問紙調査を実施した。調査時期は 2006 年 7―8 月であった。4 都道府県の老人クラブや町内会に所属する高齢者計 210 名を調査対象者とした。回答に不備のあった回答を除いた有効回答者は 178 名(男性 56 名、女性 118 名、不明 4 名、年齢 60 歳―95 歳、平均年齢 72.6 歳)であった。調査目的や方法、プライバシーの管理、回答への自由意志、回答中断の権利などについての説明および質問紙への回答をもって調査協力の同意とする旨を、質問紙の表紙に明記した。

調査内容

調査対象者には、以下の教示文により、具体的に友人 1 名の想定を求めた。教示文は 2 種類用意し、調査対象者には教示文を変えた 2 種類の質問紙をランダムに配布した。教示文は、“ふだんからよく会う友人(以下 HI 友人)はいますか”と“めったに会わないが大切な友人(以下 LI 友人)はいますか”の 2 種類であった。想定される友人がいるかどうか回答を求め、“いる”と回答した場合には以下の質問項目に回答を求めた。

(a)友人と会う頻度: 1 項目 6 件法(1; ほとんど毎日、2;週に数回、3; 月に数回、4; 年に数回、5; 数年に 1 回、6; 何十年も会っていない)で回答を求めた。(b)友人関係成分尺度: 丹野(2008)が作成した 9 つの尺度から 5 つの下位尺度(安心･気楽さ、娯楽性、相談･自己開示、支援性、肯定･受容)を抜粋して用いた。さらに、調査対象者の負担を軽くするため、1 尺度あたり 3 項目に削減した。また、高齢者に理解しやすいように項目を一部改訂した。尺度項目を Table 1 に示す。想定された HI 友人関係および LI 友人関係について“2.; はい、1; わからない、0; いいえ”の 3 件法で回答を求めた。(c)関係性評価: 丹野(2008)と同様に、友人との関係満足度(1 項目 5 件法)と人生の重要な意味(3 項目 3 件法)に回答を求めた。さらに、調査対象者全員に星野他(1996)が作成した QOLS-E の Psychological Index の 3 因子“死の受容”、“精神的安定”、“coping と死生観”(12 項目 3 件法)に回答を求めた。

結果

友人関係成分と関係性評価の構造

友人関係成分尺度の各機能成分と「人生の重要な意味」の尺度について 1 次元性を確認するために、主成分分析を行った。主成分負荷量.400 以上を基準に判断したところ、いずれの領域も 1 次元性が確認された(Table 1)。Cronbach の α 係数は.631-.873 であった。HI 友人関係と LI 友人関係とで、各友人関係成分と関係性評価の得点を比較するために t 検定を行ったところ、“人生の重要な意味”のみ LI 友人関係のほうが有意に高く($p < .05$)、他の尺度に関しては有意差がみられなかった。

Table 1 友人関係機能性分尺度と「人生の重要な意味」の主成分分析結果

安心・気楽さ （α=.831）	負荷量
その友人との関係は、安心できるものだと思いますか？	.877
その友人といると、ほっとしますか？	.875
その友人といると、楽ですか？	.845
寄与率	77.462%

娯楽性 （α=.631）	負荷量
その友人と話すと、愉快な気分になりますか？	.882
その友人と一緒にいると、退屈しませんか？	.767
その友人と一緒にいると、楽しいですか？	.707
寄与率	60.200%

相談・自己開示 （α=.719）	負荷量
その友人には、何でも話せますか？	.791
その友人は、あなたに悩みをうちあけてくれますか？	.704
その友人は、よい相談相手であると思いますか？	.669
寄与率	52.292%

支援性 （α=.872）	負荷量
その友人を、頼りにすることができますか？	.868
その友人とは、困った時に助けあえると思いますか？	.846
その友人は、いざというときに、力になってくれると思いますか？	.845
寄与率	72.845%

肯定・受容 （α=.873）	負荷量
その友人は、あなたを大切にしてくれていると思いますか？	.792
その友人は、あなたのよい部分を認めてくれていると思いますか？	.791
その友人は、あなたのことを受け入れてくれますか？	.783
寄与率	62.221%

人生の重要な意味 （α=726）	負荷量
その友人は、あなたの人生を語る上で、欠かせない存在ですか？	.794
その友人との大切な思い出は、たくさんありますか？	.716
その友人と出会ったことで、あなたの人生は変わったと思いますか？	.650
寄与率	52.194%

注) いずれの尺度も主成分分析を行い、1 次元性を確認している。

QOLS-E の尺度構成

QOLS-E の尺度構成を確認 [3]するために、因子分析(主成分解、プロマックス回転)を行った。因子負荷量が.400 未満の項目を削除して再度因子分析を行った結果、星野他(1996)とは異なる 3 因子が抽出されたため、抽出された因子に新たに命名した(Table 2)。

第Ⅰ因子(α= .702)は、心配や安心感に関する 3 項目からなる因子であったため、“日常の安心感”と命名した。第Ⅱ因子(α= .698)は、人生や老化の受け止め方に関する 3 項目からなる因子であったため、“人生の受容”と命名した。第Ⅲ因子(α= .610)は、日常のストレスやトラブルの対処に関する 3 項目からなる因子であったため、“否定経験への対処”と命名した。

友人関係機能成分と関係性評価、QOLS-E との関連

HI 友人・LI 友人別に、各友人関係機能成分と関係満足度と QOL との関連を検討するために、重回帰分析のくりかえしによるパス解析を行った [4]。第 1 水準は友人関係成分尺度得点、第 2 水準は関係性評価(関係満足度、人生の重要な意味)、第 3 水準は QOLS-E である。解析はいずれも変数増加法の重回帰分析によって行い、偏回帰係数の有意水準 5%基準で投入を打ち切った。分析の際には性別および年齢を統制するため、説明変数に投入して分析を行った(Figure 1, 2)。

考察

HI 友人関係は“自己開示”が間接的に日常の安心感を促進する機能を果たしていた。一方、LI 友人関係は、“安心・気楽さ”“肯定・受容”“自己開示”が間接的に日常の安心感を促進し、“肯定・受容”が直接的に人生の受容を促進する機能を果たしていた。以下の考察では、まず HI 友人関係の機能について論議し、次に LI 友人関係の機能について論じる。

HI 友人関係の機能

高齢者の HI 友人関係において、“自己開示”が“関係満足度”を媒介して日常の安心感を促進していた。ふだんからよく会う HI 友人との“打ち明け話”を含む会話コミュニケーションが、高齢者の日常生活を安心して過ごす上で重要な機能を果たすことが明らかになった。

浅川他(1999)、西村他(2000)では、手段的・道具的なサポートの機能は友人関係で果たされず、“交流”や“交遊”といった趣味や会話を楽しむ活動が友人関係特有の機能であることを明らかにしている。丹野(2006)もまた、高齢者は HI 友人関係を“娯楽やコミュニケーションを目的としたつきあい”と捉えていることを明らかにしている。すなわち高齢者のふだんからよく会う HI 友人関係は、手段的・道具的なサポートの機能は乏しいが、自己開示を中心としたコミュニケーションにより、生活の安心感を増す機能を果たしていると考えられる。

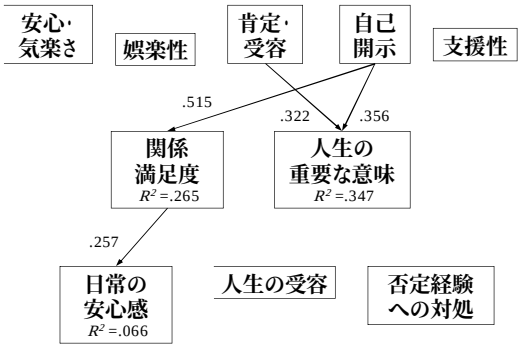

Figure.1 HI 友人関係のパス解析結果

注) 図中のパス係数は標準偏回帰係数である。性別と年齢は統制変数として投入したが、有意なパスはみられなかった。多重共線性はみられなかった。(N = 86)

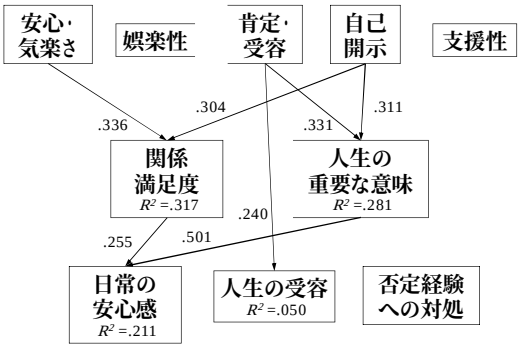

Figure.2 LI 友人関係のパス解析結果

注) 図中のパス係数は標準偏回帰係数である。性別と年齢は統制変数として投入したが、有意なパスはみられなかった。多重共線性はみられなかった。(N = 92)

Table 2 QOLS-E(Psychological Index)の因子分析結果

項目	日常の安心感	人生の受容	否定経験への対処
	α=.702	α=.698	α=.610
これからのことを考えると心配になることがありますか？	**.795**	-.030	-.303
不安やゆううつを感じることがありますか？	**.638**	.101	.080
自分の死後も子どもや孫がいると思うと、安心できますか？	**.468**	.102	.311
一生を振り返って、これでよかったと思いますか？	-.153	**.720**	.043
年をとることは、よいことだと思いますか？	.078	**.650**	-.268
年をとるにつれて、若いときとは違う楽しみを感じることがありますか？	.302	**.630**	.009
いらいらの解消は、うまくできますか？	-.059	-.146	**.843**
困りごとが起こっても自分のことは自分で解決することができますか？	-.096	.276	**.541**
将来、死を迎えることを落ち着いて考えられますか？	.369	-.209	**.506**
固有値	2.381	1.322	1.133
累積寄与率	26.467%	41.152%	53.733%
因子間相関		.152	.219
			.275

LI 友人関係の機能

以上の結果より、LI 友人関係は、HI 友人関係よりも“人生の重要な意味”が高かった。また、LI 友人関係の“自己開示”“肯定・受容”が“人生の重要な意味”を媒介して日常の安心感を促進し、“安心・気楽さ”、“自己開示”が“関係満足度”を媒介して日常の安心感を促進し、“肯定・受容”が人生の受容を直接促進していた。

LI 友人と、自己を開示し、肯定的に受け入れあえることが、高齢者の人生において重要な意味をもち、日常生活の充実感を増す機能を果たしていることが明らかになった。さらに安心感のある関係で自己開示できるかどうかが関係の満足度に影響を与え、日常生活を肯定的にする機能を果たしていることが明らかになった。加えて、肯定的に受容する LI 友人は、高齢者の人生の受容も促進するといった HI 友人にはみられない機能も果たしていた。

丹野(2006)から、高齢者の LI 友人関係は、ふだんからよく会う友人よりも長期にわたる関係性であると示唆されている。藤田(1999)や丹野(2006)から、過去を共有する LI 友人の存在が、過去の回想による適応の促進の機能を果たしていると論じていた。量的に友人関係機能を検討した本研究の結果からも、LI 友人関係の存在が“人生の受容”を促進していることが示された。このように LI 友人関係は、高齢者の過去や人生の位置づけを肯定的なものにして内的適応を促進するという点で、HI 友人関係にはない機能を高齢者の適応に果たしていると考えられる。

本研究のまとめと限界

本研究の結果、高齢者のLI友人関係は“人生の受容”を促進するといった、HI 友人関係にはみられない内的

適応に対する機能を果たしていた。めったに会えないが過去の人生を共有する LI 友人関係の存在は、ふだんからよく会えるが老年期に新しく形成される HI 友人関係にはない機能を高齢者の生活で果たしていると考えられる。また、身体的健康状態や家族関係だけではなく、友人関係もまた高齢者の生活上の適応に重要な機能を果たしていると示された。高齢者の適応的な生活のために、老年期以前からの長期的な視点での友人関係形成を検討することが必要であると考えられる。

本研究の知見は以下の 2 点について限界がある。第 1 に、本研究は 2 種類の友人関係が高齢者の内的適応に果たす機能のみに限定して検討を行い、家族関係の影響等については検討していない点である。第 2 に、本研究の調査対象者はいずれも老人クラブや町内会での活動に参加する比較的"元気な高齢者"である点である。

引用文献

浅川達人・古谷野 亘・安藤孝敏・児玉好信 (1999). 高齢者の社会関係の構造と量 老年社会科学, **21**, 329-338.

Butler, R. N. (1963). The Life Review; An Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*, **256**, 65-76.

藤田綾子 (1999). 高齢者の対人関係ネットワーク 高木修・土田昭司(編著) 対人行動の社会心理学 シリーズ 21 世紀の社会心理学Ⅰ 北大路書房 pp.118-125.

濱島ちさと (1994). 高齢者のクォリティオブライフ 日本衛生学雑誌, **49**, 533-542.

星野和実・山田英雄・遠藤英俊・名倉英一 (1996). 高齢者の Quality of Life 評価尺度の予備的検討―心理的満足度を中心として― 心理学研究, **67**, 134-140.

石原治・内藤佳津雄・長嶋紀一 (1992). 主観的尺度に基づく心理的な側面を中心とした QOL 評価表作成の試み 老年社会科学, **14**, 43-51.

古谷野 亘・西村昌記・安藤孝敏・浅川達人・堀田陽一 (2000). 都市男性高齢者の社会関係 老年社会科学, **22**, 83-88.

前田尚子 (1992). 非親族からのソーシャルサポート 折茂肇(編) 新老年学 東京大学出版会 pp.1116-1128.

西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野 亘 (2000). 高齢者における親しい関係―"交遊""相談""信頼"の対象としての他者の選択― 老年社会科学, **22**, 367-374.

柴田博 (1996). 高齢者の Quality of life (QOL) 日本公衆衛生雑誌, **43**, 941-945.

丹野宏昭 (2006). 高齢者の友人関係機能に関する探索的検討 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 270.

丹野宏昭 (2007). 接触頻度と友人関係機能に関する検討 パーソナリティ研究, **16**, 110-113.

丹野宏昭 (2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, **20**, 55-59.

丹野宏昭・松井豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, **32**, 21-30.

註

1) 本論文は 2008 年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文として提出された論文の一部を加筆修正したものである。

2) 本論文の執筆にあたり、ご指導いただいた松井豊先生(筑波大学教授)に心より感謝申し上げます。また、本論文の執筆および調査実施にご協力いただいた佐山美咲さん、樋口真理子さん、曽田明仁さん(筑波大学)に心より感謝申し上げます。

3) 星野・山田・遠藤・名倉(1996)が作成した QOLS-E は、因子名に複数の概念が混在しており、因子名と項目内容とが合致していないと判断したため、再度因子分析を行い、因子の命名を行った。

4) 丹野(2008)では、友人関係機能成分が直接的もしくは関係満足度を媒介して内的適応に影響を与えるというモデルを仮定していた。しかし、"人生の重要な意味"の項目内容を検討すると、関係満足度のように関係性評価に関連する概念として捉えることが妥当であると考えられる。

The function of friendship in QOL of older people

Hiroaki TANNO (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

The function of friendship in QOL of older people was investigated. Older people (N = 210; 56 males and 118 females, age 60-95) were asked to imagine two kinds of friends, a high-interaction intimate friend (HI-friend) and a low-interaction intimate friend (LI-friend), and to respond to the Friendship Function scale, the Degree of Relationship value scale, QOLS-E (Quality of Life scale for elderly). Results indicated the following. (1) "Self-disclosure" in HI-friendships to the "meaning of life," indirectly promoted "daily comfort". (2) "Security, comfort", "affirmation, acceptance", and "Self-disclosure" in LI-friendships indirectly promoted "daily comfort". Moreover, "affirmation, acceptance" in LI-friendships directly promoted "life recipience".

Keywords: older people, friendship function, high-interaction intimate friendship, low-interaction intimate friendship, QOL.